

## お茶鏡

長崎純心大学1年（長崎県）

### 緒方 優姫

日本史に登場する茶道は表面だけで、体験しなければ知り得ない事が多い。客人へのもてなしの作法、茶室のしつらえ、茶道具、和菓子など、いくつもの芸術が融合した茶道には三千家と呼ばれる代表的な流派がある。そのなかでも裏千家は時代の流れに合わせた風潮を積極的に取り入れるのが特徴であるとされている。裏千家と表千家のお茶の点て方の違いや、各千家による大事にしている作法の違いなど、お稽古に参加するまでは知らないことばかりだった。

初めてのお茶の体験は例えるなら、一面に広がる深緑色の鏡だ。ほんのり漂う優しい香りと、じんわりした苦い感覚に一瞬で引き込まれた。息をつくと茶室の雰囲気と呼び戻される。焦りや不安を抱えながら始まった大学生活を彩るには十分だった。

お茶の経験が全くない私は、右も左もわからないまま始まったお稽古で一向に緊張が解けなかった。右と左を文字通り間違える事もあった。ともに稽古してくださる先輩方の丁寧な機微や動作に感動した。茶室はゆったりと時間が流れている。緊張しようと、間違えようと、焦る必要はないと言われているようで嬉しくなった。私は、大事なことの一つにお稽古の時間を思い描くようになった。他の部活動との違いは、お茶による時と安らぎのおもてなしが重視され部員同士の競いごとに発展しないところだ。ほんの些細な事かもしれないが私には特別に見えた。比べるのではなく優雅に己を研ぎ澄まし、客人に憩いのひとときを提供する。そんな茶道をととても気に入っている。

お茶の点て方さえ知らなかった素人にも、入学してから茶道のお稽古を大事にする理由がある。それは、お茶との時間の大切さを知ったことだ。大学進学前の高校時代には息をつく間もなくイベント活動、ボランティア、部活、模試、進路など忙しい日常を送っていた。自分自身の存在を肯定できなかつた私は誰かに必要とされたい一心で擦り切れるように高校生活を送っていたのだと思う。長所と呼べるものが欲しくて、追われるように企画し運営、成果を出すことを一番に考えた。成果として実った出来事も、がらんどろのように見えて認められなかつた。さらに否定した。程なくして日常は簡単に色褪せた。朝起きて「高校に行きたくない」という選択肢を作ってしまう自分に嫌気が差した。周りを巻き込んで多くの人に迷惑をかけた。学校には生涯の友と呼べる大事な友人もいた。勉強が嫌いになつたわけでもなかつた。日常の彩りが消えたあの時期のことは、お茶を飲んでゆっくり考えてみると理解できる。当時の私は追い詰めることで多くのタスクを完了し、自分に存在意義を見出すしかなかつたのだろう。

茶道を習い数日、「お茶は己を映す鏡」と感じる事が多くなつた。自分で点てたお茶を飲んで苦いと思う日は焦りや不安を抱えていて、苦味さえもまろやかで美味しいと感じられる日は心に余裕がある日なのだと、その日の心情や感情を、お茶は水鏡のように映し出す。当時の私であれば濁つた自分しか見えず、まろやかな美味しいお茶を、このお茶は苦い、と思うことだろう。ただ飲むだけでなくおもてなしの心で客人に振る舞うお茶は美しい日本の伝統文化と言

える。千利休の言葉である四規七則を充実させることができるように、これからのお稽古も励んでいきたい。茶道のお稽古を初めて4ヶ月、お茶を点てる際、抹茶色の鏡に揺らぐことのない軸ある己を映すことが私の目標だ。その第一歩目に大学生活では、お茶を知り己を知ることが積み重ねてゆきたい。